

村井 紀著 『南島イデオロギーの

発生 柳田国男と植民地主義』

中 村 春 作

このところ相次いで出される多くの柳田論の中でも、村井紀著『南島イデオロギーの発生』は、新渡戸稲造や金田一京助、折口信夫など同時代の知識人に共通する問題性のなかで柳田民俗学を論じる、とりわけ大きな視野を持ったものであり、また、(共通する問題性、すなわち)植民地政策Ⅱ「政治」との関わりにおいて、柳田民俗学の基本的な範疇、「南島」、「山人」、「常民」などの歴史的な意味を明らかにしようとした、斬新かつ意欲的な試みである。そうした、この著の問題設定の斬新さについては、すでに書評や広範な視野からの討議がなされており(尹健次「書評」『思想』八一八号、山口昌男ほか「共同討議」『批評空間』七号など)、本稿ではなるべくそれらとの重複を避けつつ、本著の意義やそこから展望される課題について、簡単に述べておきたい。

言うまでもなく、昨今盛んな柳田論の背景には、私たちに共通の課題としての「近代」の再検討、すなわち、近代に「創られた伝統」(E・ホブズボウム)の解体、見直しへの欲求があり、またそうした動向に沿っての、柳田の学問方法への懐疑(その「実証性」の内に隠されて在るイデオロギーや、その「想像性」の発掘)がある。村井の議論もそうした大きな流れの中の例外ではなく、柳田民俗学一個の内部の問題としてではなく、より大きな(日本)近代の

「知」そのものを問題とする広がりの中での議論である。村井は、度々著書中にも引用する、B・アンダーソンのナショナリズム論などのたすけをも借りつつ、「琉球処分」・「日韓併合」・台湾支配・アイヌ排除など、いわば「外部」の「切断/隠蔽」(「政治の隠蔽」)による自己同一性神話の構築Ⅱナショナリズム形成という図式の中に、柳田「民俗学」が内包する問題性を見出そうとする。特に彼の議論を特徴づけるのは、「体験が原因で「民俗学」が見いだされたのではない。体験が見いだされるのは「場所」である。」として、柳田民俗学を「実際に彼がいた「場所」から」、「日韓併合」に関与した事態から見よう」とする立場、つまり言説の思想性を言説が産出される「場」においてとらえることにこだわりつつ、その分析視角である。この分析視角そのものが村井の議論の真骨頂であり、そのなかで明らかにされる柳田民俗学のイデオロギー性は、確かに、これまでの柳田論を一新する価値を持つものである。

更に付け加えれば、村井のする議論がより強烈な印象をもって私たちに對してくるのは、それが単に、かつての西欧の人類学者に似た「知的禿鷹」(V・デロリア)ぶりを告発するに止どまるものではなく、著者自身の歴史的体験にも基づく、再生産され、より強固なものとなる言説としての柳田民俗学への内省から発するものであるが故であり、また、柳田などの関与した近代日本の歴史が、「はるかな「歴史」ではなく、われわれが関与したそれ」であるとすると、強い当事者意識に支えられているからである。

柳田の『海上の道』および「三部作」(『後狩詞記』・『石神問答』・『遠野物語』)の産出される「場」を軸として、渦を巻くようにして展開される本著の議論を、今ここで詳細に論ずる余裕はないが、

主要主題の一つでもある、ナショナルリズムと「起源」を論じることとの関わりをめぐって、若干の印象を記しておきたい。

近代ナショナルリズムを形成する諸言説が、その主題として民族や、国家の「起源」を好んで論じたものであることは言うまでもない。そしてそれはまた「起源」を論じることによって、「起源」を神秘化し「隠蔽」することでもあった。村井もまた、このことに着目し、柳田や金田一らの（そして現代の「日本回帰」のイデオロギーにも連なる）、「起源」への「遡行」や他民族を巻きこんでの「同祖論」論議が、外へ向かっての「起源／侵略（失地回復）」という共通したパターンに、そしてアイヌなどマイノリティーに対しての「同化」政策に直結するものであることを、明確に論じている。つまりは、村井の言う「他者性の切断／隠蔽」に他ならず、その意味で「起源」に関わる言説こそ奇怪であり、醜悪なものだと言わなければならないのである。本著は、そうした問題性を柳田の言説生成の政治的「場」において内在的に論じて、余すところがない。

そうした本著における議論の上に立って、評者の関心に沿いつつ感想を記すならば、事柄は、柳田民俗学の「政治」への参与であるのと同時に、「日本」を主題として語ることが、いかなる「語り」において成立するかという、根の深い問題にも関わってくるように思われる。柳田の『海上の道』における「流通・交流」への視点がある、いかにして、同一文脈中において、「固有・土着」の命題へと融合し、変容していくか、そして更には「日本の二千六百年は、ほとんど一続きの移住拓殖の歴史だったと言ってもよい。最近の北海道・樺太・台湾・朝鮮の経営に至るまで、つねに隅々の空野に同胞を分ち送って、新たな村を創立せしめる努力があったことは、こ

ごとく記録の上で証明せられている。」（『日本の祭』と述べるに至るかは、彼における「政治」の表出であると共に、まさしく主題として「日本」を語る思想家に共通の、「語り」の問題でもある。「同時的な空間を時間的なものに転換する、…他者・歴史を消去する装置」（前出「共同討議」における柄谷の評）はどのようにして語られ得たのか。「つまりは海上の交通は遅かれ早かれ、いったんは断絶せずにはいなくなったのである。」（『海上の道』）という発言が、なぜ（これは本著が明快に説くところである）、そしてどのように「破綻なく」語られたのか、これは、宣長の『古事記伝』における、ある種の廻環するような論証法への興味にも通じる、まだまだ議論されるべき問題であるように思われる。そして、そうした「閉域」の論証法を無化する「語り」として、何が想定され得るのか、著者がそうしたものとして比定しているらしい折口信夫「中間者」の議論が今後更にどう展開されるか、興味深いところである。

（一九九二年四月一五日 福武書店刊 二五六頁 二四〇〇円）